スーパーファンド
世界の先物に分散投資

サブプライム（信用度の低い顧客向け）ローン問題は根深く、世界の金融市場は混乱が続いている。その中で、高パフォーマンスを示しているのが世界の先物に分散投資する「スーパーファンド・ジャパン」だ。３つの戦略があり、昨年12月～今年2月までの騰落率はリスク、リターンの低い順に「A戦略」プラス13.43%、「B戦略」プラス19.91%、「C戦略」プラス31・19%（いずれも米ドル建て、総合リターン）。この期間、日本の平均株価はマイナス13.07%、米国のＮＹダウはマイナス8.27%など、世界中の株価指数は下落しており、「投資ポートフォリオのエアバッグ（防御策）としての可能性を見せた」（スーパーファンド証券）としている。同ファンドについてスーパーファンド証券のマーカス・ビュッヘル社長に聞いた。

騰落率

A +13%　B +19%　C +31%

（昨年12月～今年2月）

スーパーファンド証券　社長
マーカス・ビュッヘル 氏

金融混乱の中 高パフォーマンス

――「スーパーファンド・ジャパン」の高パフォーマンスの要因は何でしょうか。

「当ファンドの投資対象は個々の銘柄ではない。世界100以上の先物市場を取引対象としており、大きく分けると、エネルギー、金属、穀物、農産物、株価指数、通貨、債券、短期金融市場に投資している。重要なのは流動性のある大きなマーケットに投資するということ。市場が上がると判断すればロング、下がると判断すればショートポジションをとり、上げ相場でも下げ相場でも利益獲得を図る。この投資スタンスが威力を発揮し、世界的に株式市場が低迷したこの数カ月の間にも、好調なパフォーマンスを得られた」

流動性重視

◆

――各種先物への投資について、売り買いの判断が難しいのではないでしょうか。

「運用は人の手を排除して、自社開発の完全自動化トレーディング・システムによって行う。トレンド・フォロー、テクニカル分析、分散投資、リスク管理を基本方針とし、これらを相互に連携させて、システムが的確に判断を下す。ファンダメンタルズは考えない。人間だったら思いがけないミスをすることもあるが、システムならそういうこともない。スーパーファンドの旗艦ファンド『SuperfundQ―AG』（販売期間終了）は設定された96年３月から今年２月までに基準価格が7.2倍になったが、その間のＮＹダウは約2.2倍になり、平均株価はマイナス31.84%だった。このことからも、当社のシステムの有効性が分かる」

◆　◆

――御社について教えてください。

「スーパーファンドは95年にオーストリアのウィーンで設立され、翌96年から個人投資家向けに少額で投資できるファンドの提供を始めた。現在では世界18カ国に28オフィスを展開している。顧客数は５万人以上で、運用資産は14億米ドル。日本には2005年に進出した。日本を重要なマーケットとして認識しているが、日本の個人投資家はまだ株式へ投資するウエートが高い。当社は長期投資におけるポートフォリオ分散の必要性を日本の投資家に知ってほしいとして、他社と協力してヘッジファンドの入門書を発行したり、ＤＶＤを配布したりと、各種の啓蒙（けいもう）活動を行っている」

◆　◆　◆

――今後の世界の市場についてはどう考えていますか。

「当ファンドにファンダメンタルズは関係ない。ただ、サブプライムローン問題はまだ終息せず、今後、米国が景気後退局面に入る可能性もある。ドルの下落はまだ終わらないとの観測から、当面は世界的にボラティリティ（変動率）の高い相場展開が予想される。当ファンドにとってはチャンスが続きそうだ」

運用判断 完全自動化
ファンダメンタルズ 考慮せず

申込メモ

申込単位	A10万円以上、B100万円以上、C1000万円以上
申込手数料（税込み）	上限5.25%
販売会社	キャピタル・パートナーズ証券、アーク証券、エコ・プランニング証券